



理事会だより (8・11)

一、秋季俳句大会について①コロナ感染の拡大・不安定な状況の中で第二部大会を実施するかにつき意見を交換し、判断のタイムリミットを八月末として会長決定に一任することになった。なお会長より昨年の文化の日俳句大会実施時との状況の違いなど説明あり。②投句は延べ百六一名二四七組、大会参加意向表示は六五名、選句締切は九月八日で準備中。(事業部) ③大会当日の役割分担に付き口頭で説明あり、九月理事会でペーパー配布。(総務部)

二、秋季大会会場の横断幕が隔間みどり理事から提供され披露、併せて梅まつり大会横断幕も提供頂いた。

三、梅まつり俳句大会の兼題を九月理事会で審議するので各自準備の要請。(事業部)

四、中野文字子さん(理事・沈丁)は八月十三日逝去されました(享年九十歳)。

※笛まつり俳句大会(九月十一日)は中止となりました。

「俳句おだわら」10句抄 (660号より)

大石和子 抄出

揚羽蝶ふふふの翅とるるの口
就中虚心坦懐心太

山法師十字十字に咲き通す

わかりあふごとく海月のひらきあふ
ヒップホップやらせてみたし大百足虫

蛇のでる暑き地獄やかき氷

遠い日や蛍飛び交い皆がいた

どこまでも道どこまでも麦の秋

梅雨蝶の群れては沈む野菜畑

スクワットの途中ががんば横切って

神山つとむ 抄出

蜘蛛の罠に囚はれ朝の雨三粒

特大の母のおにぎり麦の秋

朝掘りの筍ひとつお裾分け

子が分けてくるる一粒さくらんぼ

流れにも風にも夏の匂ひかな

改札に鎖骨がどつと夏来る

十葉やみんなはじめて老いの坂

ごきぶりの疾走庫裏の長廊下

梅雨寒や心湿りの時来たる

谷風や白を重ねる山法師

菅野 英余

尾崎 一夫

出澤 洋子

畠 梅乃

小澤 園子

下平 美子

二上 光子

肥後ちさこ

久保寺トミ子

竹下由里子

近藤 久江

関戸わよこ

門松 鳳文

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

田中 幸子

長谷川きよ志

中村 昌男

新井たか志

俳句おだわら（7・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（6・24）

久江報

花菖蒲一滴の水着こなせり

足立 和子

浮彫の龍の睨みや驟雨来る

川本 育子

口中に若やくこころさくらんぼ

高橋 小糸

短夜や潮騒に松なびきたる

山崎 悦子

漢詩書く筆先夏至の真芯かな

近藤 久江

◆春野（6・19）

きよ志報

枇杷盗む昔悪餓鬼今鴉

秋山 昇

薄衣恋がすどほりしてゆきぬ

伊藤はる子

小満や色濃く入れるハーブティー

内田知江子

紫蘇を揉むこの残生のおきどころ

尾崎 一夫

生前も死後も藪草はびこりぬ

瀬戸 悠

ひまはりや大きく笑ふ娘となりて

二見 和江

息の出来ぬ程薦の絡まる夏館

長谷川きよ志

◆みなみ（6・18）

かほる報

今朝の雨紫陽花道をせまくする

市川めぐみ

雨近し枇杷の匂ひのこもる午後

斎藤 静

単線の駅舎に仰ぐ燕の子

加藤 健治

忘れたき夢鮮明に短い夜

加藤れい子

曇り空忘れさせてる花菖蒲
朝風に飛び立つ気配燕の子
人と会ひ口の楽しや花うつぎ

小瀬村信子
豊田 幸枝

梅雨寒や捨てた言葉をまた拾う

加藤かほる

◆沈丁（7・2）

寶子山報

カーテンの中の孤独や青嵐

中野 文子

青嵐砂蹴り上げて走る子等

若村 京子

転んでも此の世界あり梅雨の坂

柳澤ミサ子

伐採の悲鳴聞きたり青嵐

田中 恵一

夏嵐すべてが去りて我れひとり

河本 純子

マスク脱ぎ子らの鼻歌青嵐

瀧本 敦子

不器用な昭和の指や青嵐

勝木 澄子

憲法を語る学生風青し

菅野 英余

山頂へ五色のままに百合続く

高井 幸子

碑の戦記うづもれ苔の花

片野 節子

結果待つ窓はふるえて青嵐

峯尾ユキエ

どくだみの香りを散らし青嵐

河本チヨ子

モンローのポスター押さえ青嵐

清水美代子

青嵐たまゆら白き花を見ゆ

寶子山京子

◆香雨・梅ごち（6・26）

忠山報

江ノ電や今あぢさゐは海のいろ

肥後ちさこ

黒南風やアラビア文字の貨物船

関戸わよこ

名水をたたへ古城の花菖蒲

青山 典子

京扇あふげば届く京の風

門松 鳳文

鈴なりの窮屈さうなミニトマト

吉田 百代

鮎釣りの釣果見せあふ昼餉どき

吉田 康雄

青梅の一つ一つをたなごころ

陌間みどり

読むでなく弾くでもなくて梅雨ごもり

小澤 純子

六月や見かけぬものに蛇の目傘

池田 忠山

◆こよろぎ(7・14)

つとむ報

花火手に闇の海辺へ走り込む

板谷 雅泉

丹沢の育んでゐる雲の峰

植松テル子

紫陽花の風にあそべる夕餉どき

神山つとむ

◆青梅(7・6)

幸子報

バス停に風鈴を聞く夕べかな

大塚 行人

惑星に水したたかや山青葉

湯本とし子

口広く水を引き込む青田かな

加藤まり子

地下足袋の一步先飛ぶ梅雨の蝶

久保寺トミ子

苔生ふる堀低くして京の寺

田渕 令子

◆山北(6・30)

由里子報

大滝の笥は空へ還りけり

田中 幸子

和田恵美子

水中花二人で祝う誕生日

尾崎 幸子

かたつむり口約束の人を待つ

中山 妙子

晩年は急がず迷わずかたつむり

尾崎 竹詩

半夏生少女のゆるいワンピース

石田加津子

ほうたるやコンパスで描く花模様

竹下由里子

◆鷹(7・2)

十五報

地下鉄の8番出口探す朱夏

青木 孝子

炎昼やガパオライスの目玉焼

池田 令子

市中まなかの此処も十葉おのれ咲き

西賀 久實

老鶯や大き切り株菩提寺に

佐宗 欣二

若夏や旅の鞆に透頂香

須田 晴美

返信の締切近し半夏生

中田 笑子

滝壺出づ一人髪を解きたり

百川 秀子

市バス待つ港湾通り大南風

山崎美知子

石窯にピザ焼き上がるハンモック

柏木 良花

小女の白き腓や夏の夕

庄司 下載

蜜豆や良くも悪くも平均点

瀬戸 りん

暮るるまで日にあり父の日の櫂

高橋久美子

幅跳の均す砂上や雲の峰

中山智津子

初めての蛍見せむと子の手引く

齊藤 桂

神棚の榊御灯みあかし明易し

芹澤 常子

峰雲や寄木細工の自鳴琴

巴里祭耳輪ゆらして外雀

寄せ書に残る墨の香青葉木菟

アパートの灯火ゆらげる水田かな

自慢気の天気予報士額の花

優曇華や三日続きの月の暈

ゆづり合ふ畦や揺らめく蛇の衣

バスに乗り来る子の肩や天道虫

夏帽子美術館へと入りにけり

団子屋の卓に伏せをり夏帽子

反戦歌忘れて久し梅を干す

薫風に我が作曲のマーチなり

波音の聞ゆる寺や百日紅

草刈や川落ち合ひて音高し

川音を呑み込んである青薄

◆実のり(7・15)

蜘蛛の囀の主小さき姿して

分蘖のすすむ青田や過疎の村

水馬富士山上りきる水の面

潮匂ふ路地を攻めある花ダイゴ

大木 敬子

大島美恵子

田下 昌人

中根 和子

加藤 幾代

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

史郎報

白鷺の孤独を抱いて巢に帰る

七月も十日を過ぎてレオ吠える

ほう螢きみは彼の世のわれなのか

百合の花さまざま香り横向きに

夕べの陽金色ガウンにお召替え

サルビアに心の活写めらめらと

大夕焼異郷に就きし父のこと

若人は卒業記念夏穂高

昼顔の淑女面なる長い夜

◆おほる(7・13)

方舟に乗れる我等や日雷

平和詩に込めた小二の沖繩忌

子等の帰路帽子の色や麦の秋

向日葵や平和祈りて仰ぐ空

雲の峰キャプテン一人五厘刈り

西天に星瞬きて夕涼み

ママチャリや親子三人夏帽子

ちちははの汗の野良着ぞ懐かしき

汗だくのガッツポーズや甲子園

なにげなく垣根を払う団扇かな

一票にあしたの汗を託しけり

木村 和彦

青木たけを

伊藤 道郎

井上 良子

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木 一路

岡本 史郎

秀泰報

横塚 昌平

中津川 晴江

坂入清四郎

廣田 悦子

石井きよ子

香川 花子

中村 昌男

二上 光子

高橋みどり

石井千代子

加藤 春江

汗の手を握り返して人を恋う

グランドに刻む青春玉の汗

朝取れのりはりはり噛める胡瓜かな

◆草むら(7・18)

戦場となりし畑や草むしり

茶の稽古偲ぶ鶴首半夏生

青桐も剝き身直前の夕べかな

吾の授粉余計なお世話花かぼちゃ

◆たけのこ(7・13)

コロナ禍の半分化粧半夏生

語りたき友はるかなり青簾

打ち水に土の匂ひや午後六時

青空と涙を少しさくらんぼ

梅雨明けや麦チョコひとつ茶の友に

◆無所属

原爆忌スチールの鶴羽ばたけぬ

サングラス鼻から下は器量良し

遠足の列を止めたるだんご虫

緑裂き洒水の滝の一直線

子の来れば灯のみづみづし胡瓜揉

欲捨てて今が幸せ青葉光

中根登美子

小野 菊土

風間 秀泰

重満報

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

悦女報

三木 泰子

小宮 早苗

久津間百合子

宮崎 悦女

徳田 公子

小林永以子

大佐田俊美

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

畠 梅乃

木村美千代

七夕の飾り賑はふデンマーク

いざごごの絶えぬこの星ソーダ水

七月の遺骨の黙や海の黙

熱中症アラート校庭に赤い旗

暮腹を据えねば生きがたし

ひよいと出会いひよいと別れる草の世は

ところてんは海だ海だと突いている

冷蔵庫の中で何もかも腐る

野良猫のいつも逃げ腰花みかん

荒波の音の離れぬ鑑真忌

白脛の微笑ましきや盆の花

言いかげしこと言いそびれ走馬灯

鎌倉に入りて単線濃紫陽花

日焼子は種火のごとく睡り落つ

戦争はよせとひまわり凜と立つ

なんとといふ夏われ生きて還りくる

チョコアイス食べたきも我は管だらけ

七月号についてお詫びして訂正します

3頁下段16行目 (誤) 大気当日↓(正) 大会当日

6頁杉崎せつ句9行目 (誤) 夕薄暮↓(正) 夕薄暑

鈴木久美子

北村 文江

岩楯惠津子

岡田 典代

小澤 園子

大石 和子

大石 雄介

瀬戸 正洋

山田 照子

田畑ヒロ子

穂坂志げる

杉山あけみ

山口 千代

須田 聡子

木村予史重

芝田 礼子

礼子

(七月号追加)

内田知江子

天窓を開け夏空を迎へけり
勢ひに影の遅るる今年竹
尺蠖の一步の先に海展く
梅雨明や胸にちよこつとつけ黒子
ひよつとして悪女なのかもダリア咲く

一ノ瀬茂代

振りかへり日傘差し上ぐ別れかな
ランナーの締まる腓や雲の峰
蟻地獄静もる真昼の山の寺
青芦原釣竿高く空を切る
老鶯や畑に差し置く鋏一丁

石井 秀稀

緑さすテニスコートの打球音
丹沢や青む畑の風薫る
ダービーや此処一番の大舞台
路地裏に誘ふ灯り茄子の花
夏畑心のすき間埋めてゐる

青木 勝子

冬暖か土竜思はず顔を出し
草餅や遺影の母は緋着て
里ざくら館山城を抱へ上げ
沈丁の垣をめぐらし家静か
薫風や時をり鳴りて愛の鐘

門松 鳳文

口笛の澄みたる音色天高し
秋空へ高々と吾子さし上ぐる
秋空の余白へ放つ竹とんぼ
秋澄むや天守きりりと聳え立つ
果てしなき空を席卷鱗雲

加藤 富江

実梅おつ昼の畑は休憩中
集落のラジオ体操青田波
花合歡やバスに乗らずの土踏まず
平家螢阿修羅の水と生きる水
あさがおや六時きつちり寺の鐘

風間 秀泰

盆花が一月早く顔を出し
平和とは戦いの無い世木槿咲く
盛夏には空の碧さが海に似て
硝子戸の家守の動き鳥に似て
真つ当に睨めっこする蜥蜴の子

尾崎 一夫

竹の子を抱く吾が子を抱くやうに
竹皮を脱ぐ雲水の腕捲り
今年竹明日はこの世が見ゆるかも
竹を伐る伐るや月よりかぐや姫
竹を割るねぢり鉢巻き秋惜しむ

山崎美知子

白靴や図書館までの並木道
川縁に伸ばす手白し初蛩
うち置きし仙人掌に花出勤す
畑取りの西瓜のぬくし猫車
子を訪うてソファアに眠る白夜かな

庄司 下 載

米朝の船場言葉や夏羽織
羽抜鳥世論調査の電話とる
父の日や一室の書庫書に溢れ
麦秋や退職の荷に名刺帖
夜坐果つる僧堂に蟾動かざる

久津間百合子

脇道も横道も好き夕薄暑
夕薄暑一步一会の散歩かな
孫のスマホ指の裁きや夕薄暑
花菖蒲雲を乱して池の鯉
片蔭を拾ひひろひて石畳

菅野 英余

しゃっくりの止まらぬ男梅雨曇り
青嵐女医すっぱりと髪を切る
加齢だたとほけなさるな青葉木菟
打水や夫の留守番板につく
雲の峰上手に生きて百一歳

城苑俳句・秋の部

(合同句集第十二集 69〜83頁より近藤久江抄出)

佇みて唯たたずみて虫時雨	寺澤	明美
数珠玉を取る人もなき水辺かな	徳田	公子
鰯雲朝の黙解く海女の笛	豊田	幸枝
曾我山の六本松も秋の声	鳥海	壮六
コーヒーに砂糖は一つ小鳥来る	中田	笑子
妖艶な女形の舞か酔芙蓉	中津川	晴江
法師蟬日暮の楨に鳴ききりぬ	中根	和子
ときめきは明日への力星今宵	中根登美子	

横塚 昌平

土偶めく豊饒の腰藍浴衣
紫陽花よ某^{それかし}今も三分刈
万緑の故山瓦礫の烏克^{ウツクライナ}蘭
桐咲くやここが一条戻橋
灰白く匂ふうなじや蛩船

山本 すみ

日焼の子夏休み終え脚長く
柿若葉セーラー服の白眩し
水中花エイトビートに誘われて
堅物が思案の末や鉄線花
滴るや待つ掌の心ゆれ

第四十五回笛まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「笛」又は「道」(秋季詠込のこと)

「桔梗」

二句一組(何組も可) 未発表作品に限る

締切 八月十二日(必着)

整理費 一組に付一、〇〇〇円(句稿に同封のこと)

投句先 〒250・0135 南足柄市荏野一八二六

豊田幸枝宛(電話〇四六五(74)〇八五一)

選者 各地区有力作家・当協会役員

賞 市長賞以下十五位まで

第二部 俳句大会

日時 令和四年九月十一日(日)午前十一時受付

会場 南足柄市女性センター研修室一、二

*大雄山線大雄山駅改札口を出て左隣

参加費 五百円(飲物呈)

席題 秋季雑詠一句・当日出題一句

×切 十二時 選・総互選

賞 観光協会会長賞以下参加者全員

〈主催〉みなみ俳句協会

〈後援〉南足柄市・神奈川県俳句連盟・

小田原俳句協会・各地区俳句協会

鶏頭や自由研究しめくくる

頬に触れ日だまりのよう猫やなぎ

流れにも風にも在りし秋の声

不揃のコスモス不機嫌な私

手拭の白抜文字や涼新

深秋や母の小部屋の広辞苑

人影無し秋の灯だけの終列車

林檎むくやさしき嘘をつきとほし

一揺すり二揺すりして萩括る

木犀や自転車時速二十キロ

無風なる二百十日の静かな夜

外されぬままの半鐘鳥渡る

小牡鹿の立つ落日の櫟みち

梨食みて病なんぞと見せし笑み

大花野子らと走りて風になる

溜めるだけ溜めてどんぐりそれつきり

鈴虫や修正液の乾き待つ

ひとつづつ新酒の樽を平手打ち

変らざる愛と言ふ名の鶏頭花

天高し園児よさこい大見世場

椎の実の米の味する開戦日

小鳥来る石屋の石の橋がかり

中野 文子

中村 裕子

中村 昌男

中山 妙子

中山智津子

西村 英子

野川木一路

陌間みどり

長谷川きよ志

畠 梅乃

濱本 主雄

林 スミ子

廣川 公

廣田 悦子

二上 光子

二見 和江

古屋 徳男

寶子山京子

牧石美千雄

三木 泰子

蓑宮 わか

宮崎 悦女